

2013年6月24日

## 全国の男女 765 名に聞いた 『死にまつわる迷信、慣習』

第一生命保険株式会社（社長 渡邊 光一郎）のシンクタンク、株式会社第一生命経済研究所（社長 長谷川 公敏）では、全国に居住する男女 765 名を対象に、標記についてのアンケート調査を実施いたしました。

この程、その調査結果がまとまりましたのでご報告いたします。

### 《調査結果のポイント》

#### 死にまつわる迷信（P2）

- 友引葬儀、清め塩を気にする人は過半数
- 北枕や夜爪を気にしない人は6割以上

#### 迷信の伝達経路（P3）

- 親から迷信を教わったという人が圧倒的多数
- 誰からも教わったことがない人は3%未満

#### 迷信を話題にする相手（P4）

- 約5割が「配偶者」や「子ども」に
- 「話題にしない」人が約2割と次世代への伝達が停滞

#### 宗教的な心情（P5）

- 「悪いことをすればバチがあたると思う」「虫の知らせはあると思う」人はそれぞれ8割強

#### 占いや易を気にする人の割合（P7）

- 占いや易を気にする人は約4割
- 40～54歳の年齢層が多い

#### 宗教的な行為実施率（P8）

- 「ほぼ毎年、初詣に行く」「お守りやお札をもっている」人はいずれも65%以上

#### ＜お問い合わせ先＞

（株）第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部  
研究開発室 広報担当（津田・新井）  
TEL. 03-5221-4771  
FAX. 03-3212-4470

【アドレス】<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi>



## 《調査の目的》

私たちの日常生活には、さまざまな俗信や慣習が根付いています。死に関するものも例外ではなく、身内が亡くなったら年賀状の欠礼、神社や祭り、お祝いごとへの出席を控えるなど、「忌」の慣習は多々見受けられます。葬儀の場では、清め塩を配ることも定着していますが、これらはすべて、「死はけがれ」の意識に基づく慣習です。

そこで、死にまつわる迷信や観念がどの程度、生活に浸透しているのかを把握し、日本人の心の一端を俯瞰するために調査を実施しました。

## 《調査の実施概要》

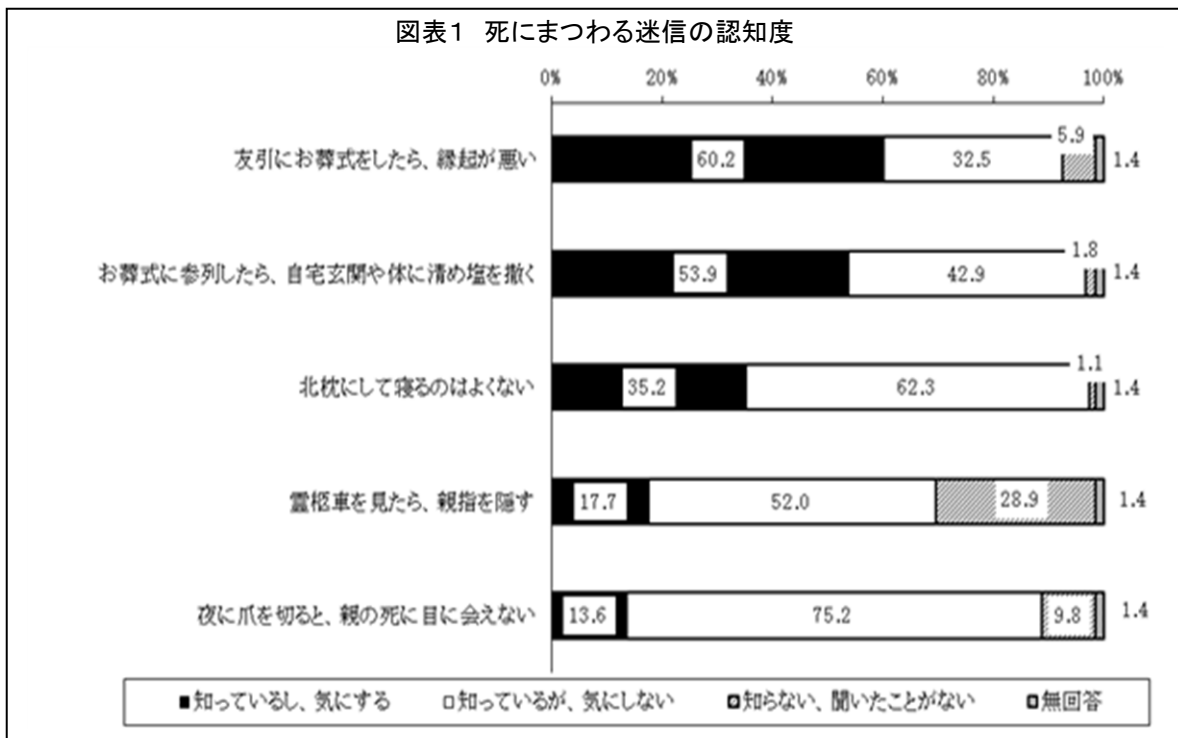
1. 調査地域と対象 全国の20歳から84歳までの男女
2. サンプル数 765名
3. 有効回収数(率) 713名(93.2%)
4. サンプル抽出 第一生命経済研究所生活調査モニター
5. 調査方法 質問紙郵送調査法
6. 実施時期 2012年9月13日から9月23日
7. 回答者の属性

(単位:人)

	20～39歳	40～54歳	55～69歳	70～84歳	性別合計
男性	68(19.9%)	91(26.6%)	92(26.9%)	91(26.6%)	342(48.0%)
女性	86(23.2%)	95(25.6%)	102(27.5%)	88(23.7%)	371(52.0%)
年齢層合計	154(21.6%)	186(26.1%)	194(27.2%)	179(25.1%)	713(100.0%)

# 死にまつわる迷信

友引葬儀、清め塩を気にする人は過半数  
北枕や夜爪を気にしない人は6割以上



気にするかどうかは別にして、死にまつわる迷信の認知率は全体的に高く、なかでも「北枕にして寝るのはよくない」(97.5%)、「お葬式に参列したら、自宅玄関や体に塩をまく」(96.8%)、「友引にお葬式をしたら、縁起が悪い」(92.7%)は、認知率が9割を超えていました(図表1)。

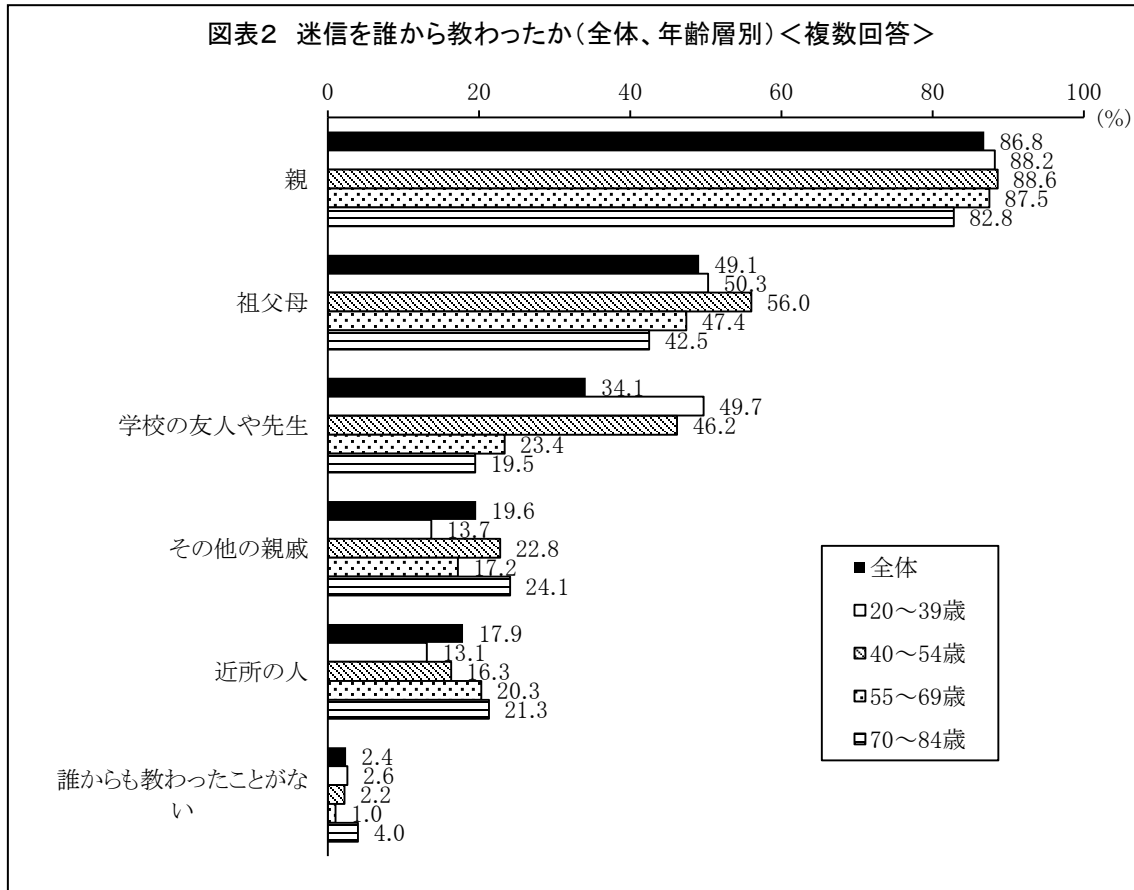
そのうち、「知っているし、気にする」と回答した人が全体の半数を超えたのは「友引にお葬式をしたら、縁起が悪い」(60.2%)、「お葬式に参列したら、自宅玄関や体に塩をまく」(53.9%)と、気にしない人の割合を大きく上回りました。一方、「北枕にして寝るのはよくない」という迷信の認知度は97.5%と最も高かったにもかかわらず、気にする人は35.2%しかいませんでした。「霊柩車を見たら、親指を隠す」は、認知度も69.7%にとどまり、しかも知っていても気にしない人が全体の52.0%と過半数を占めます。

死にまつわる迷信のうち、日常生活に密着しているものについては、知識として持っているという程度であり、気にする人は少ないのですが、友引葬儀、清め塩に代表される葬式の迷信については生活の中に根強く浸透しています。

# 迷信の伝達経路

親から迷信を教わったという人が圧倒的多数  
誰からも教わったことがない人は3%未満

図表2 迷信を誰から教わったか(全体、年齢層別)＜複数回答＞

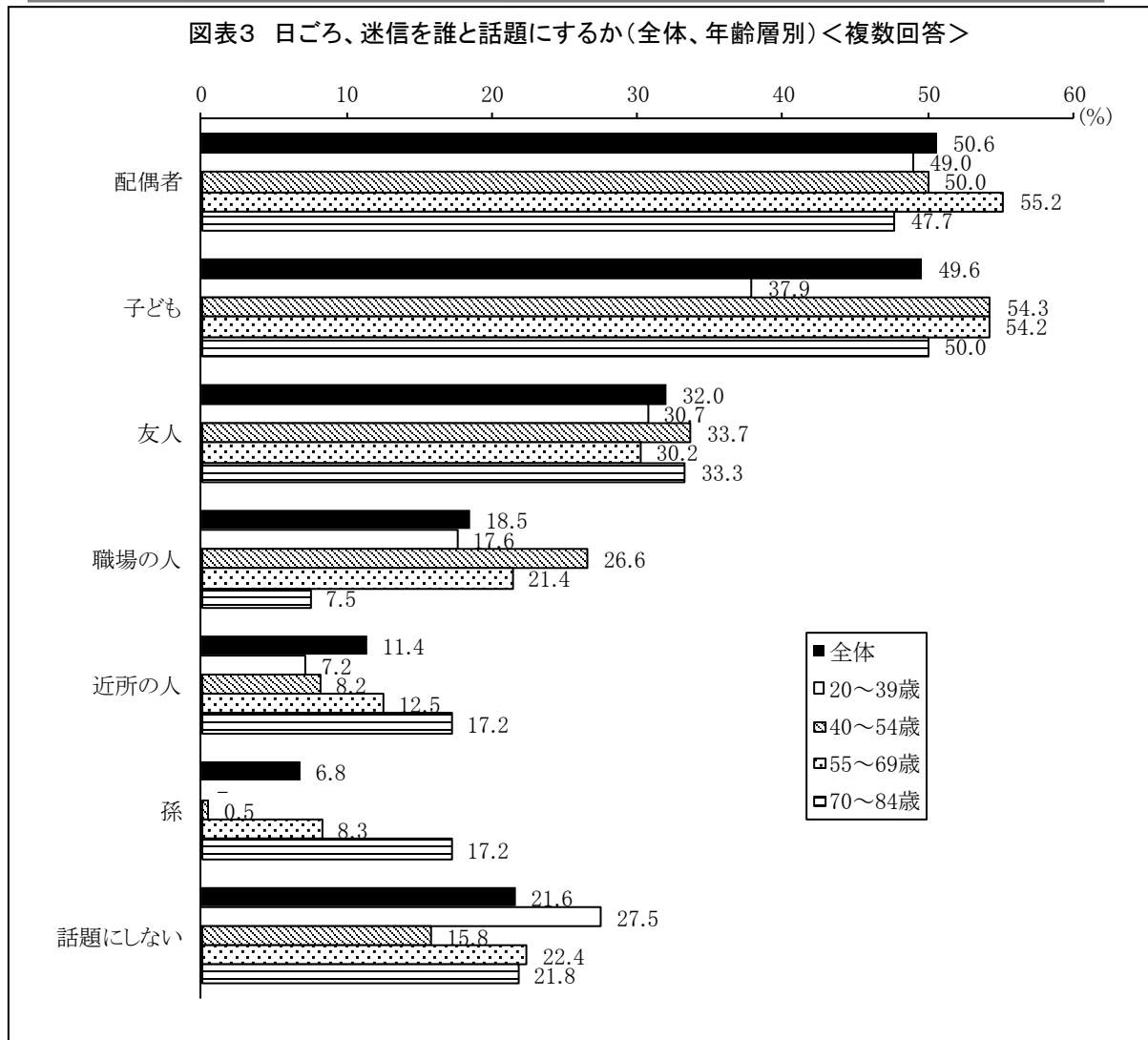


回答者が子どもの頃、誰から迷信を教わったかを複数回答でたずねたところ、最も多かったのは「親」(86.8%)で、次いで「祖父母」(49.1%)、「学校の友人や先生」(34.1%)と続きました(図表2)。一方、「誰からも教わったことはない」人は2.4%しかいなく、ほとんどの人は日常生活の中で教わった経験を持っていました。

年齢層別にみると、どの年齢層でも「誰からも教わったことがない」人は数%で、ほとんどの人は誰かから教わっていました。なかでもどの年齢層でも、「親」から教わった人は8割を超えており、最も多い結果がでました。また「祖父母」に教わった人は54歳以下で多く、過半数を占めていました。同様に、「学校の友人や先生」と回答した人も54歳以下と55歳以上では回答率に大きな差があり、54歳以下では半数近くが、学校で迷信が話題にのぼった経験を持っていました。1970年代にはこっくりさん、80年代にはトイレの花子さんなど、小中学校で迷信が流行したことなどが、その背景にあったと考えられます。

# 迷信を話題にする相手

約5割が「配偶者」や「子どもに」  
「話題にしない人」が2割と次世代への伝達が停滞



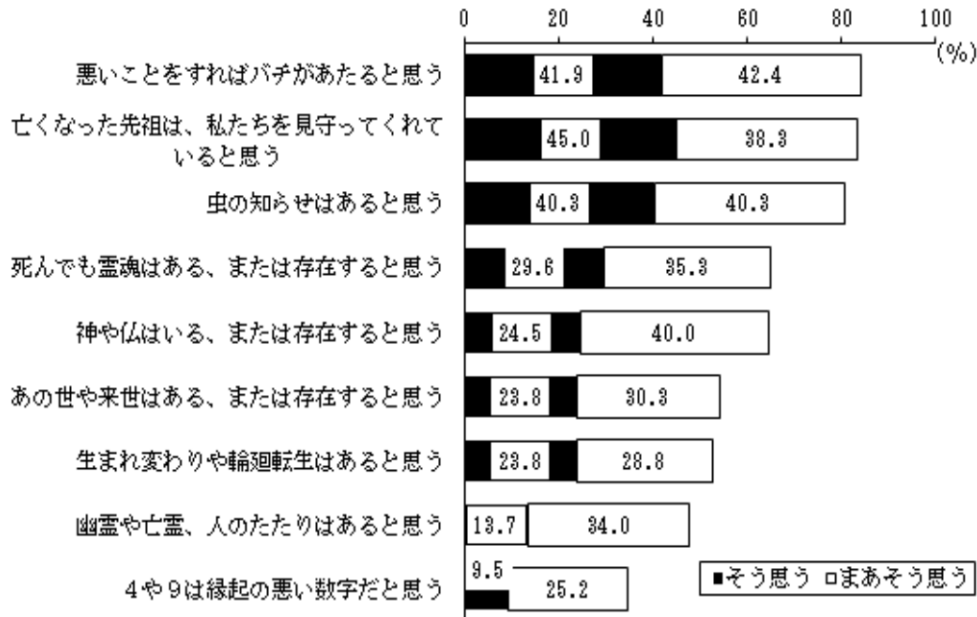
迷信について、全体の21.6%は「人に教えたり、話題にしたりしない」と回答しています。なかでも20～39歳では話題にしない人が27.5%もいましたが、子どもの頃に教わった経験がない人は2.6%しかいないため、この世代では言い伝えや迷信の伝達が停滞しているといえます。一方、「話題にしない」人が15.8%と最も少なかったのは、40～54歳でした（図表3）。

話題にする相手として多かったのは、「配偶者」（50.6%）、「子ども」（49.6%）ですが、子どもの頃に親から教わった人は86.8%いたのに対し、子どもに伝えている人は半数程度しかいません。同様に祖父母から教わった人は49.1%と半数近くいるのに対し、孫に伝えている人は70～84歳でも17.2%にとどまっています。

# 宗教的な心情

「悪いことをすればバチがあたると思う」「虫の知らせはあると思う」人はそれぞれ8割強

図表4 宗教的な心情



図表5 宗教的な心情(年齢層別)

	年齢層別 (%)			
	20～ 39 歳	40～ 54 歳	55～ 69 歳	70～ 84 歳
悪いことをすればバチがあたると思う	90.9	87.5	83.4	81.1
あの世や来世はある、または存在すると思う	63.0	63.5	50.0	41.3
生まれ変わりや輪廻転生はあると思う	62.3	68.2	45.3	35.8
幽霊や亡霊、人のたたりはあると思う	59.5	60.9	41.1	33.4

※ そう思う、まあそう思うと回答した率

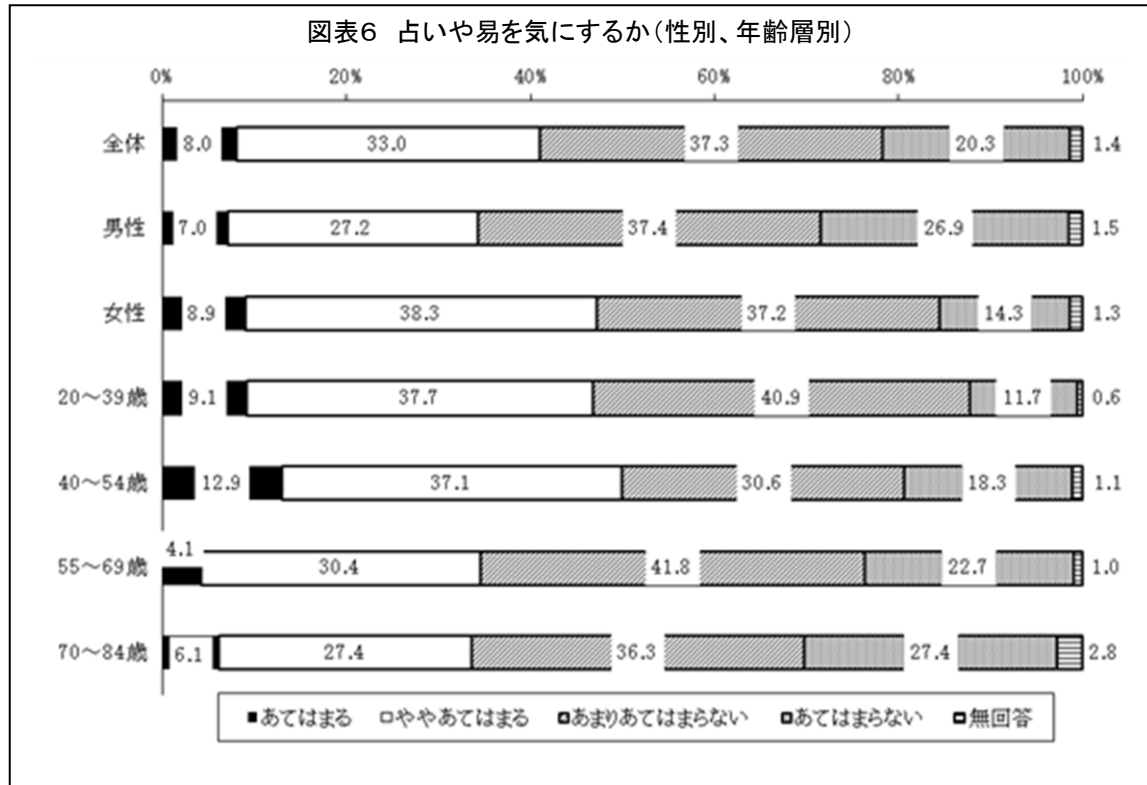
「悪いことをすればバチがあたると思う」「亡くなった先祖は、私たちを見守ってくれていると思う」「虫の知らせはあると思う」という意見に肯定的な人は8割を超えています（図表4）。

また、「死んでも霊魂はある、または存在すると思う」という人は64.9%いる一方で、「幽霊や亡霊、人のたたりはあると思う」と考える人は47.7%と半数程度にとどまり、15ポイント以上の差が生じています。「あの世や来世はある、または存在すると思う」「生まれ変わりや輪廻転生はあると思う」と考える人は、肯定的な人と否定的な人に二分されています。

年齢層で顕著な特徴があった項目をみると、若い人では肯定的な回答が多くなっています。「あの世や来世はある、または存在すると思う」「生まれ変わりや輪廻転生はあると思う」「幽霊や亡霊、人のたたりはあると思う」については、20～39歳と70～84歳との間でそれぞれ20ポイント以上の大きな開きがありました（図表5）。

# 占いや易を気にする人の割合

占いや易を気にする人は約4割  
40～54歳の年齢層が多い



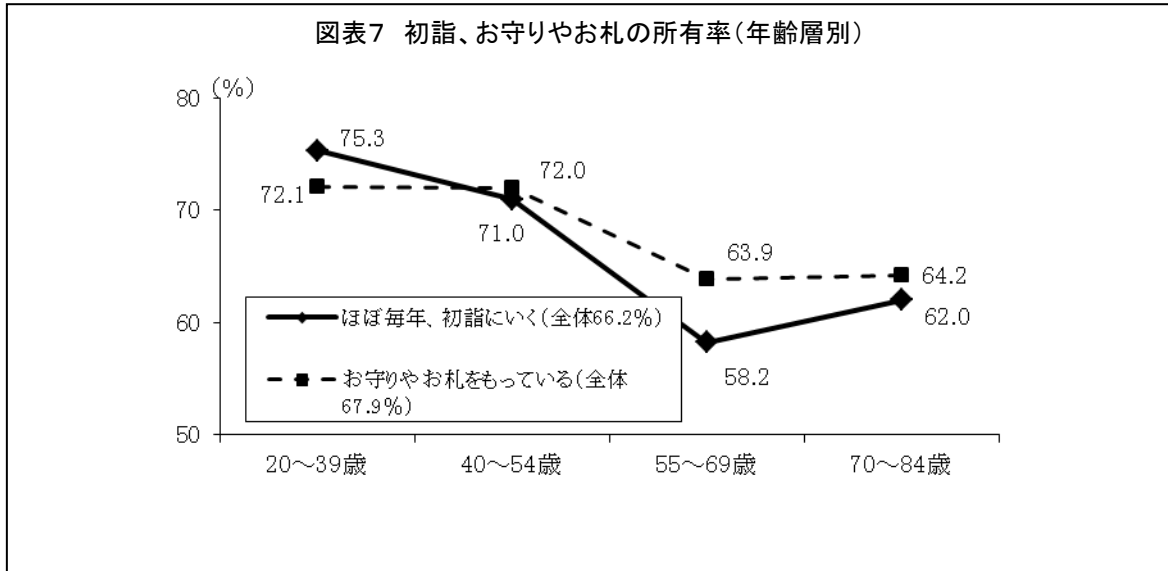
「占いや易を気にする方だ」という質問に対して、「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した人は、合わせて 41.0%となり、占いや易を気にする人は少なくありません(図表6)。

性別で見ると、気にする人は女性のほうが多く、男女で 13 ポイントの開きがあります。年齢層別では、気にする人は 40～54 歳で最も多く 50.0%と半数を占めました、55 歳以上では逆に気にする人が少なく、70～84 歳では 33.5%にとどまりました。



## 宗教的な行為実施率

「ほぼ毎年、初詣に行く」「お守りやお札をもっている」人は  
いずれも 65%以上



宗教的な行為の実態について、本調査では初詣とお守り・お札の所有についてたずねました。その結果、「ほぼ毎年、初詣に行く」と回答した人は 66.2%、「お守りやお札をもっている」と回答した人は 67.9%と、いずれも 7 割近いという結果でした（図表 7）。

性別に見ると、いずれの質問とも男性より女性のほうが肯定回答率がやや高いという結果でした（図表省略）。一方年齢層別で見ると、54 歳以下と 55 歳以上では、いずれも 54 歳以下の方が高いという特徴がみられました。また 20~34 歳では、ほぼ毎年初詣に行く人が 75.3%いるのに対し、55~69 歳では 58.2%と、17 ポイントという大きな差がみられました。

## 《研究員のコメント》

今回の調査で明らかになった興味深い点を以下にまとめました。

### 1. 死にまつわる迷信を気にする人は多い

気にするかどうかは別にして、死にまつわる迷信の認知率は全体的に高く、なかでも友引葬儀、清め塩に代表される葬式の迷信については、気にする人も多いことが分かりました。

こうした言い伝えや迷信について、日常生活の中で話題にする人は全体の8割程度います。一方で、今回の調査では、核家族化が進み、親や祖父母から次世代へ伝達されなくなっている傾向もうかがえました。

### 2. 宗教的な行為について

日本人の多くは無宗教を標榜していますが（今回の調査対象者では、信仰していると回答した人は30.3%）、初詣をしたり、お守りやお札を持ったりなどの宗教的な行為率はとても高く、なかでも若い世代でその傾向がみられます。

### 3. 若い世代の宗教的な心情について

死にまつわる迷信、厄年や占いなどを気にする人は40～54歳で特に多いことが明らかになりました。また「あの世や来世はある、または存在すると思う」「生まれ変わりや輪廻転生はあると思う」「幽霊や亡霊、人のたたりはあると思う」においては、20～39歳と70～84歳とではそれぞれ20ポイント以上の大きな開きがあり、若い世代では、特定の宗派や宗教の信仰とは別の次元で、宗教的な心情を強くもちあわせています。

若者にこうした傾向が強いことは、すでに20年以上前からさまざまな調査でも指摘されていますが、若者に特有の傾向なのか、それとも時代背景が要因にあるのかについては、これから注目していく必要があります。

（研究開発室 主席研究員 小谷みどり）